
ツインズ・ブラッド

深桩佳 藍茅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツイーンズ・ブラッド

【Nコード】

N5742W

【作者名】

深証佳 藍茅

【あらすじ】

20××年。普通だった世界に、一つの影が落とされた。『違法能力者』。そう呼ばれる者たちが、様々な犯しを行い、人々を恐怖に浸らせていた。

そんな最中、イギリス政府で生まれた部隊があった。

『イギリス政府警察部直属・違法能力者特別対策本部』。

そこに集う者たちの中で戦闘技術に優れたものは、処刑武器と呼ばれる、

唯一彼らに対抗できる武器を扱い、一掃・駆逐を行っていた。

そんな彼らの中に、最もイレギュラー且つもっとも悲しき運命を背負った

双子の存在があった。

1 - (1) プロローグ

ただ、自由になりたかった。それだけだった。

それでも、自由になれなかった。あの時から、訳も分からぬまま連れていかれたあの日から。

何もかもが奪われた。両親も、親友も、僅かに零れかけた希望の光さえも――。

少年は、ただ走っていた。その背後からは、数多の怒声や悲鳴が聞こえる。無理もないことだ。その原因と云える煌々と紅く染まる火柱が、すべてを包み、すべてを具現しているからだ。

しかし、長い時間走っていたのだろうか。少年の足は止まり、家々の間の裏道に背を預け、座り込んでしまった。そして、左手の甲にあるその傷に目を落とす。

「……クソッ。こんなどこにいられないってのに……」
そう言いながら立とうとした瞬間、重い感触が少年の左側にのしかかった。

「……なっ!？」

驚いた少年が改めてそちらを見た。

それは、彼と同年ぐらいの少女だった。

手入れがされているのだろう、真っ直ぐに伸びた淡黒い長い髪の毛。よくよく見れば、顔立ちも整っている。一般家庭はおろか、貴族の出身でもおかしくはない。それでも、少年はとある一点が気になってしまった。

右手の甲にある、彼のそれと同じもの。

「……これってまさか、……こいつも、なのか……?」
その狼狽は、明らかに少年の動揺を意味していた。

そして、彼らは知らなかった。この先にある、数多くの試練を。
そして、知る由もなかった。この先に待ち受ける、事件・惨劇・悲
劇・離別の、その全てを。

1 - (2) 二つの影

20世紀半ば、世界中ではイギリスを中心に第二次産業革命が起き、人々は化石燃料に代わる新たなエネルギー資源を作らんと躍起になっていた。そんな最中、『超能力者』と呼ばれる自らの身体に特異な力を宿した人間たちが現れた。彼らは、それらの事業の促進をせんと彼らに加担していった。しかし、数も限りというもの。彼らは世界中にわずか600人程度しかいなかった。

そんな時、一人の若い科学者が現れる。フォーライト・M・ゴーストカート。当時若干25歳だった彼は、その状況を打破しようとする一つの仮定理論を成立させた。それが、『人工的に能力者を生み出す』というものだった。これが発表された当初、人々は驚きに満ちていたが、後にこれが正論だと認められると人々はこれを支持し始めた。しかし、彼らはまだこの先に起こる事件というものを知る由もなかった。

世界中からの適正候補者の強制召集。 家族関係者の無差別殺害。

子供が候補者の場合はその親も召集の対象となり、その候補者の身体に限界が来れば有無を言わず殺された。結果として残っている資料には、それが原因で候補者の三分の一が死亡している。そのような消去法を繰り返していくうちに、適性に合った者はゴーストカート家の家紋を『烙印』として体の部分に押された。そして、世間に出てきた彼らは数多くの犯罪を行い、人々を恐怖に浸らせていた。そんな時勢が続くとだれもが思ったそのとき、とある一つの組織がそれに一つの終止符を落とした。

『イギリス政府警察部直属・違法能力者特別対策本部』

21世紀初頭にイギリス政府に作られたその組織は、その創始者が当時15歳の少女だったというものでも驚きなのだが、最も衝撃だったのが人工的に生み出された能力者を『違法能力者』と決定づけたことだった。彼らは、高い戦術能力と『処刑武器』という唯一対抗できる武器を扱い彼らを一層・駆逐していった。そうしていくうち、組織が結成されたわずか二年後に『ゴーストカート研究所強襲作戦』を決行。たった20人足らずで見事に作戦を成功させた。しかし、それで終わるはずもなかった。世界にいる違法能力者は9千人ほどであり、今も戦いは続いている。そして、現在――

× × ×

5月22日、イギリス・ウェールズの南西部に位置する小さな町ソラヌス。赤レンガや白レンガで敷き詰められた街道に沿うようにレンガで造られた家々が並ぶ。その一角の屋根の上に、その影はあった。

一人は、淡黒く腰までまつすぐに伸びた髪の毛に横の一部分を細く三つ編みにしている。その容姿はよすぎるといっていいぐらいに整っていて、華奢な体躯は年頃の少女そのものである。その少女は、何やら真剣なまなざしで魔法陣のような展開式を見ている。そんな少女と対照的に、屋根の上に寝そべっているもう一つの影は、何やら暇そうなのか少女よりも一回り小さそうな体をゴロゴロとさせている。その時、ふいに

「・・・リアラ、まだつかめないの？」

と尋ねる声がした。初めて聞く人がいれば、女子の声にも聞こえそうな少し高めのアルトヴォイスにリアラと呼ばれた少女は振り返った。

「・・・ごめん。なかなか出て来ないから・・・」

「そっか・・・。ただだけ慎重なんだよ、こいつ」

謝罪の言葉も気にしていないといった感じなのか、少年はうんざりしたような声を上げた。

「任務開始から１７分も押しているってのに・・・」

そういうと、フード付きのジャケットの中からおもむろに銀時計を取り出した。その時刻がさすのは５時４８分。相当長く待っていることになる。しかし、そんなことも気にしないといったようで、

「まあ、もう少し待ってみるよ。もうすぐ朝もあけるし、奴も尻尾を出すんじゃないかな」

とのんきにまとめた。対してリアラは、

「だといいんだけど・・・。大丈夫かな、リオル」

と心配そうに少年の名を呼んだ。すると彼はすくつと立ち上がり、

「大丈夫だって！」

と笑った。

× × ×

同時刻、イギリス・ロンドン。霧の都とも称されるこの都市に、かの組織の本部施設はある。というのも、その施設は大半が地下にあり地上にあるのは居住フロアのみである。そんな地下フロアにある大食堂の厨房に野太い声が響きわたる。

「白！^{バイ}さつさと降りてこないか！」

「・・・いるんだけど」

とその声も空しく、白と呼ばれた少女は厨房の入り口のほうにワゴンを携えながら立っていた。

「どうせ、リフィルさんの朝食を運べって言うんでしょ。そんな日課言われなくてもわかってるってのに・・・」

「だったら、なんでもつと早く来ないんだ・・・」

「大体、あたしの部屋とここってものすごく遠いんだから。それぐらい理解してよ、父さん」

そういうと、目の前にいる父親と呼んだ男性から、質素だが栄養の

豊富そうな朝食をもらいワゴンの荷台に乗せた。その彼女の髪の毛はショートボブで横が肩にかかりそうなくらいの長さだ。瞳も調度よすぎるくらいに大きく、その色は両方とも黒だ。多国籍国家というのもあり、イギリスに移民がいるのはいたって普通なのだが、ここまで基本的な東洋人はあまりいない。そんな彼女は、厨房を出る際に「ああ、そうそう」というと、

「・・・あの二人は、どうしたの」

と聞いた。すると、

「あいつらはまた仕事だ。遅れるとよ」

「・・・そっか。分かった」

と短い会話をして、白は厨房を出た。

× × ×

「・・・・・・来た!」

高めのハスキーな声が、興奮しながらも落ち着いた声を上げた。

「やっと出てきたか、あのちょこまか野郎」

いよいよかという声とともに、リオルも立ち上がる。その体軀はリアラ同様華奢でありながらしなやかな体つきをしている。赤茶色の髪の毛は後ろに細く一本にまとめられている。その容姿もまた整っていて、初めて見る人は女子と誤ってしまっただろう。

「これからどうするの?」

というリアラからの質問に、リオルはクルクルと回った後、

「ん・・・。じゃ、こうしよう。あいつの能力は把握しているから、僕のほうで足止めしておく。その間に、拘束術お願いできる?」

という作戦を言い渡し、屋根の端に足をかけた。

「いいけど・・・。あれは少し厄介だから・・・無茶しないでね」

「大丈夫だって・・・多分」

そうやり取りをすると、リオルは落下姿勢を取りはじめた。

「それじゃ...始めよっか」

「気を付けてね。こっちのほうでサポートは頑張るから」

「・・・うん」

それを合図に、彼の手にはめられている二つの腕輪は光り、二つの影は戦場へと飛び込んだ。

1- (3) その刃の向かう先

6時、本部局内。ワゴンを押す少女

白バイ 春娘チュニャン

——は愚痴をこぼしながら、共用通路を歩いていた。

「……ったく、なんでまた仕事なんだか。積もる話もあるつてのに……」

とはいえ、それをこぼしたいの相手はいない。彼女の父親——

黄ホアン 狼明ランミン

——が言うには、彼らは仕事だというものだから彼女はますます焦燥が募っていた。

「でも……、仕方のないことなんだよね。このことに関しては、あの二人が決めたことなんだし。だからと言われてもなあ……」

そう言っているうちに、白は運んでいた朝食を渡す相手の部屋の前に来ていた。ドアプレートには英語で『執政室』の文字。この部屋には、あの人物の補佐として何度も入ってはいたものの、この扉を開けるのには常に緊張が走るものだ。そう思いながら、彼女はその扉をノックした。

「……お早うございます、朝食をお持ちしました」

「入っていいわよ」

ほぼ即答。聞いて僅かもしないうちに扉越しにかけられた声は、女性らしさを兼ね備えつつも少し線を張るような冷静さを帯びていた。「それじゃ……、失礼します、リフィルさん」

そう言いながら、白は空いたほうの手で執政室の扉を開けた。その室内は、東から西にかけて天井まで伸びるガラスがつけられ、今は東側からの日が差している。その天井を支える柱には、書類やら文献やら小説やらが詰まっており、小さな図書館のような雰囲気を出す。窓の下には、ソファ―ベッドがついていたり、部屋自体が小さな家のような。その部屋の中の、窓側寄りにある木で造られた執政机に、何やら相当集中している女性の姿があった。

「……う、そこにいったらだめなのに……」

バツがついたような声を出して、ホロスクリーンのキーボードを凝視している。またあれか、と白は思いながらキーボードに手を伸ばした。

「・・・萬子で落とせないなら索子で落とせばいいと思うんですけど」

そう言いながら、操作を始めた。そこへ、

「・・・白。勝手にスクリーンを見るのはやめなさいと言っているはずよ」

と、つい先ほどまでそれらをいじっていた女性が声を上げた。

「だったら、コンピュータ相手に麻雀負けるのもどうかと思います
が。・・・リフィルさん」

そう言つて、その女性のほうを見た。

リフィル・ランバート。この対策本部の創始者であり、執政室長且つ戦闘要員総指揮總統の肩書を持つ。ここを創始してから6年が経ち、現在は21歳でありながらもその実績は相当ともいえる。そんな彼女を一言で表すならば、『容姿端麗』の一言に尽きないともいえる。栗色のウェーブがかかった長い髪の毛に、落ち着きのある顔立ち。身に着けた服装も17、8世紀のようなロングドレスでありながらも、それが逆に彼女の威風を際立たせている。

「だって、仕方がないじゃない。コンピュータのくせに強いんだから。・・・ところで、今日の朝食の説明を頂戴」

「・・・はい。今日の朝食は、フレンチトーストに季節の野菜サラダのソルトドレッシング和え。それにフレッシュジュースにヨーグルトのベリーソースがけです」

一通りの説明を終え、白もまた二段になっていたワゴンの下から朝食を取り出した。

「では、いただきます」

「いただきます・・・と言いたところだけど、一ついいかしら」とふいに、リフィルがその手を止めた。

× × ×

同時刻、ウェールズ。その当の本人のうち一人、リオル・クライシスは少しボロボロになった状態でソラヌスの街道にふっししていた。「・・・くっそ。あのネズミ野郎・・・」

何かに当てられたのか少し声が震えている。そこへ、

「・・・だから気を付けてって言ったのに」

と屋根の上から声がかけられた。

「確かに把握しておいたとはいえ、あそこまで強いと思っていなかっただからね」

「ごめん。私も資料見ておけばよかった」

「別に、リアラのせいじゃないよ。さっきのは僕のヘマなんだしさ」

「・・・うん」

そう言つて、屋根の上にいたリアラ・クライシスは9mのありそうな高さをなんの迷いもなく飛び降りた。

「でも、まだこの圏内にいるから問題ないと思うよ」

「同感だね」

そういうと、リオルは腕輪のはめられている左手を差し出した。その左手には青白いスパークがバチバチと音を立ててその左手を覆っていた。

「電流を操るのは確かに厄介だけど、これをものにしておけば大丈夫でしょ」

といったと同時に、彼の意味でやったのかそのスパークは静かに収まった。

「これで経路もつかめたし、あとは捕まえりゃいいだけでしょ」

「分かった。・・・いこう、リオル」

その言葉を合図にして、二人はまた走り出した。

× × ×

「・・・またその話ですか。今のところ、正直な決意もつけてないんですよ?」

同刻、白はリフィルから例の話を聞いていた。

「実際、本部の状況は分かっているはずでしょう」

「だからって、・・・そりゃあの時のことは本当に感謝していますけど」

実は、本部が設立されてから三年後、白ら親子はリフィルによって保護、という形で本部の登録していた。彼女の母はあの実験によって既に死亡していた。そうして行くあてもなかった彼女たちは本部に入り、今こうやって生計を立てている。

しかし、今こうやって世界にまで支部を広げた対策本部イギリス当局は彼らと渡り合える戦闘要員がたったの6人。さらに支部別に分けてしまえばたったの4人しかない。

「だからって、私にその話を吹っ掛けられても困りますよ。渡り合えるかもしてないですけど」

「それを何とかできないかしら。戦術能力も高いわけだし」

「だとしたら、ほかにも逸材はいると思いますよ」

結果として、それが彼女たちの話し合いを加速させていた。

「それに・・・」

「それに?」

「いつまであの二人を、利用するつもりなんですか?」

1―(4)時はまだ始まったまま

「突然人聞きの悪そうなことを」

「現実そうじゃないんですか。ただ利用しているようには見えないくらいにすつごく利用して」

白はそうリフィルに対して糾弾していた。実際、彼らを保護したのは彼女であり彼らをここに置いているのも彼女が権限を利用して
いるものだからだ。三年前に、白がここに来たときにはすでに二人
がいたようなものである。

「別に今すぐ止めるってわけでもないですよ。ただ、控えたほうが
いいかと」

「でもねえ、こっちにも理由はあるのよ？色々と」

「それが気になるんです」

「言っていいのかしら？これ相当な秘密よ？」

「構いません。私が納得できるのであれば」

「・・・じゃあ、言うわよ」

そういうと、リフィルは一呼吸をし、語り始めた。

「まず、これは彼らで決意したことなのよ」

「・・・は？」

「言葉どおりの意味よ。ここに來たての時には、まだそんな決意で
さえも彼らにはつけられなかった。

・・・彼らはね、嫌だったのよ。誰かに変に利用されることを、彼
らは望みもなかった」

「・・・そんな、単純なこと？」

「彼らの過去ぐらい、あなただって知っているはずでしょう。あんなこと、私でも御免よ。それに・・・」

×
×
×

同刻、ウェールズ。

朝の来たソラヌスの街道を、一人の男性が息を切らして走っていた。いくら起きている人が少ないとはいえ、ここにこれ以上長居するには危険だというのを感知していたのか、その眼はかなり血走っていた。その時、

「・・・やつと見つけた」

という幼い少年のような声が男性の目の前から聞こえてきた。そこに立っていたのは、後ろに髪を結わえた少年だった。

「ラルゴ・トカレフト、だよね？本部局員のリオル・クライシスだけど、・・・これ以上逃げれると思うなよ？」

そのリオルの服装は、先の戦闘で少しボロボロになったフード付きジャケットにショートパンツ、黒っぽいブーツといったどこにでもあるような服装だが、それでも彼――ラルゴ・トカレフト――

にはそれでも注意をしている部分があった。

リオルの両手首にはめられた、鈍色に光る腕輪。

一見、これまたどこにでもありそうな腕輪だが、それでも何かが違った。そして、ラルゴが逃げようとした瞬間、

「・・・逃がさないって、言っただよ」

と、何かが彼の首に巻きついた。それは、まるでピアノ線のように細いワイヤーで、その先には短剣の先だけを取ってつけたような鈍色に光る刃。

「がっ・・・、ぐあ・・・」

「下手に無茶すると真面目に死ぬよ・・・まあ、殺さないように保護するのも大変なんだけれど」

どれだけ彼がもがいても、ワイヤーは逆に食い込むばかりである。「それにね・・・」

そうリオルが続けたそのとき、ラルゴの体に首に巻きついたもの

と同じワイヤーが巻き付いた。彼が唯一動かせる状態になる目を見張ると、そこには、同じ腕輪を両手首にはめた少女が立っていた。

「・・・束縛、成功です。」

「サポートありがとね、リアラ。さてと、話の続き。僕以外に誰もいないと思うなよ」

それを言うと同時、二人はさらにワイヤーをきつく締め上げる。

「あと、任務開始からもうすぐ30分が経つ。この仕置きは精一杯受けてもらおうか」

そう言うと、リオルは腕輪から延びるワイヤーの左手をかけた。

同時に進む、青白いスパーク。それは、ラルゴの知っているものであり、彼が恐れていたものだった。

「やっぱりね。こんな顔すると思った」

そしてさらに続ける。

「僕の場合、あなたたちのやつを倍にして自らの能力にするからさ。だから、覚悟して神に祈れ。せいぜい、生き残れますようにってね」
言い終わったと同時に、彼らを強い光がつつんだ。

× × ×

「それに、彼らには時間がないともいえる。違能者に限界があるのはわかるわね」

「あれ・・・ですよね。・・・ほんとに、あの二人もあんなっちゃうんですか？写真の中の、彼らみたいに」

「その最期を知っているからこそ、というものね。あの二人はそれを自覚して、こちらの利用されることを選んだ・・・。納得がいったかしら？」

そう言い終わり、リフィルはうんざりしてもう懲り懲りといったような仕草を見せた。それに呆れたのか、白はただため息をつくしかなかった。

「納得は行きましたけれど・・・、このままでいいんですかね、あ

いつら」

「というと？」

「・・・まだ、物足りない気がするんです。あいつらにはね」

× × ×

その頃、ソラヌスの街道には多くのパトカーが止まっていた。

結果として、ラルゴ・トカレフトは逮捕。そのままロンドン塔送りになった。ロンドン塔というのは、違能者が逮捕された際に収容せれる場所であり、そこで執政長であるリフィルから様々な詰問を受ける場所である。ただ、そんな御用の光景にも目をくれず、リオルは家の外壁に背を預けていた。そして、ただ左手の甲を見つめていた。

その甲にあったのは、『烙印』とも呼ばれるかの家の家紋。そして、それに注がれるは、強すぎた怒りと憎しみ。これによって彼はすべてを奪われ、裏切られ続けた。ただ、その記憶しかない。その時、

「いや、本日もありがとうございます。おかげでこちらも難儀せずに済んでいます」

その声は、彼の目の前に来た若い警官のものだった。

「いや、仕事ですから手伝えるならまだいいほうですよ」

と、リオルも笑顔で返す。同時、彼の傍にリアラが傾いてきた。どうやら、寝てしまったらしい。心配そうに警官が声をかけるが、「この程度は問題ない」と言うと、彼女よりも小柄な体でリオルは難なくおぶさってしまった。そして、彼らが今帰るべき場所へと歩いて行った。そして、ただ、彼は思う。

——あんな、同情の見える言葉なんていない。
——そんなんなら、利用されたほうがい

い。

——そして、必ず——

こ

の戦いを、終わらせる。

・・・と。

× × ×

とある一つの組織に、イレギュラーと呼ばれた双子がいた。

血の繋がっていない双子は、昔すべてに裏切られた過去を持っていた。

その双子は、意図的に持ちたくもない異能の力をその身に埋めつけられた。

そして双子は、すべてを壊すことのできる武器に魅入られ、戦うことになった。

そうして双子は、自らの持っていた名前を捨て、新たな名を自らに与えた。

——もう決して、泣くようなことはしない。たとえ、誰かに傷つけられても。

その誓いを胸に抱き、双子は今日も戦場に赴く。

自分たちの抱えた過去を変えるための、違能の飛び交う戦場へと。両手首にはめた鈍色の腕輪と、それぞれが左手と右手に宿された違能を携えて。

1・(5)いつものひと時はまた過ぎて

12時34分、対策本部・イギリス本局内の大食堂。ちょうど昼時のこの時間帯には、各フロアにいる登録局員たちがお腹を空かせて一様にここに集まる。そこに並べられたテーブルの、通路側の一角。そこでは何やら独特の会話がされていた。

「・・・んでまあ、あれだ。要は相当苦戦されたということなんですよ？」

「全く同じ。あいつは今までのやつよりも用心深すぎたからさ。任務時間かなり押しちゃったし」

そのテーブルに座っていたのは、クライシス兄妹と白バイ 春娘チュニャンの三人。それぞれ双子が14歳、白が16歳という一見すればどこにでもいそうな親友関係そのものだが、実をいうとそうでもなかったりする。

この本局には、各国からの移民がいるため、彼らのように10代の局員たちもいる。しかし、白やクライシス兄妹はそれぞれがまた独特な生い立ちを持っており、そのためか同年代の親友とやらいなかったのだ。そんな中、白が13歳の時に本局ですでに戦闘要員として動いていた双子、というよりはリオルのほうに「友達になつてほしい」と言ったところ、彼は二つ返事で返し晴れて親友となったのだ。

そして、今現在ではこうして三人で食事をするのも日常的なものとなったが、それでも白には気になることがある。まずリアラが着ている水色のワンピースは袖が長いため問題はないが、その問題とやらがリオルにあった。彼は、これのほうが着やすいとタンクトップにショートまたはハーフパンツという格好をしているが、何より腕から先を隠す部分がないため怪我をすることがまずないはずの左手に包帯を巻いている。その理由はいたって簡単なもので、

その左手の甲に押された『烙印』を、見られたくないというものだ

った。

まだ双子、殊にリオルのほうは特に酷いことをされたのだろう、『あの実験』についてはいまだにトラウマを覚えている。執政長のリフィルが言うには、「入りたての頃は、私たちに関わるうともしなかった」というほどでもある。それでも、今こうして赤の他人がほとんどもいえる局内での生活には慣れたものの、いまだに彼らの視線には恐怖を感じているようで、その結果がこの包帯に表れている。

裏切られたくないのだ。自分たちが持つ『違能』によって。

彼らに昔のことを話してもらおうとすると、リアラはともかくリオルは強い拒絶反応を見せる。それぐらいに、彼らは数の多すぎた裏切りを受け続けた。もう、されたくもないとでもいう位に。

しかし、それをも気にしていないかのようにリオルは大きく背伸びをし、話を続けた。

「ん・・・くう。でもアイツ、僕が倍返しにしたときになんか怯えていた様だっただよな。自分の能力で負けるのがそんなに嫌だったのかな」

「リオル、行儀悪いよ。・・・多分そうなんだとは思っよ。もつとも、倍返しされてしまっただなんて思っていないだろうし」

「そこはリアラに賛成かもね。そんなこと、やられたらリオルの場合は対処できかねないからね」

「白、それどういう意味で言ってんの」

先の言葉にカチンと来たのか思わずリオルは立ち上がってしまう。白はそれを軽く制し、何とかことは過ぎた。

「まあ、それはいいとして。・・・これ終わったら執政室に行く必要があるからね、二人とも」

「って待って。まさか・・・」

一瞬にしてリオルの顔が青ざめる。

「いやだって、仕方のないことだと思うよ。覚悟したほうがいいって」

× × ×

「はあ、はあ……。リフィルさん、もう勘弁だってさっきから」「全く。これだから最近の若い輩は。もう少し耐えたらどうなのよ」「いや、だからもうげんか……。って、これ以上深く刺さないでくださいってば！」

昼を食べ終わり、執政室に向かった三人はこの時点まではよかったものの、その後が大変だった。入るや否や、早速リフィル任務開始がなぜ遅れたかを訊問され、その後にはリオルの左手に静電気のよくな小さなスパークが迸るのに気づくと、机の上にあつた羽ペンを手に取りまるで神速とでもいうかの如くのそれと彼の左手に刺した。そして今、体術でも確実に勝りそうなりフィルに、リオルはなす術もなく薄いじゅうたんの敷かれた床の上を転げまわっている。

「……リフィルさんって、こういうときとかになんでSになるんだか」

「処刑武器って案外裏の使い方すると、いろいろ恐ろしいからね」

「裏の使い方って、どんな使い方よ……。？」

「言い、二人はリアラが両手首につけている腕輪に目を落とす。

この本部に登録している中で、極めて戦術能力が高い局員には『戦闘要員』としてこの武器を携え、達能者と唯一対抗することができる。ただ、この武器が手に入る方法というのは、本部のほうで与えられるか、はたまた偶然手に入れるかの二つしかない。また、武器の特性によって各々の戦闘法が分かれてくることもあり、実際クライシス兄妹はそれぞれの連携を利用した肉弾戦、リフィルの場合は少し独特で、『烙印』の押されてある部分に羽ペンの先を刺すことによってその達能を吸収して戦うといった戦法をとっている。そ

れはもちろん双子にも適用されるため、少しばかりきついものもある。そのせいか、体力のなくなったりオルはそのまま床にふっしてしまった。

「面白いわね。もう少し耐えてくれればいいものを」

「多分無理があると思いますよ。強ければ強いほどにその達能者に影響が及びますから」

「でもねえ、……まあいいわ。リアラ、リオルを連れて自室で待機して頂戴。それと白。私はこの後部屋を出るから、しばらく部屋番を頼むわね」

「いいですけど、……またですか」

「最近また増えてきている可能性があるから、状況を把握しないと」
「……わかりました」

そう言い終わらないうちに、リフィルは執政室を出た。

× × ×

2個のエレベータを経由してリフィルが行きついたのは、『情報管制室』と英語で書かれたプレートが貼られていた部屋だった。その入り口である自動ドアのそばに設置されてインターホンを、彼女は押した。

「アネツサ、開けてくれないかしら」

『またいつもの観察ですか。そういうの本当に好きですね』

スピーカーを通して流れた声は、流水のような清らかさを帯びていた。

「別にいいじゃない。最近の動向が知りたいだけよ」

『分かりました。今ドアを開けますので』

そういうと同時、オートロックだった自動ドアはウィーンと音をたてて開いた。開くと同時に、リフィルも中に入る。その部屋の中は、通路の明るさとは比べ物にならないような暗さであり足元に注意しないといたところに奔るケープルに足を引っ掛けそうでもある。

そこにやはり、足を引つ掛けこけた小さな人影があつた。

「あいたたたた・・・」

「シャル、貴方どこまでドジなのよ」

「だって、ここまでなると私だってこけますよう」

「いらつしやるのでしたら、二人ともこちらに来てくれませんか」

その会話を遮つたのは、数多くのモニターの目の前に座っていたミディアムロングの髪の毛をポニーテールにした女性だった。その隣の空いた席におさげの小さな少女がいそいそと座った。

アネッサ・グライトとシャーリィ・ゼフィロット通称シャル。この二人がこの当局で情報管制をしている登録局員だ。

「さつてと・・・。早速で悪いのだけれど・・・」

「今の状況を、見せていただけるかしら」

1 - (6) 異変は強く影を落として

「今の状況を、見せていただけないかしら」

唐突、しかし強く求めたようなその声にアネッサ・グライツは、
「・・・了解しました」

と二つ返事で答えた。そして、つかの間の静寂。アネッサ同様に、
暗い部屋で薄く光るホロキーボードを叩くシャーリー・ゼフィロツ
トの顔に緊張の面持ちが走る。

「・・・セッティング完了しました。ポインタ、起動します」

と、アネッサの静かな声と同時に、16分割されていた大画面のホ
ロスクリーンが一気に別の画面へと切り替わる。右には赤いポイン
タで示された平面地図が、左には8分割された監視カメラの映像が
映っている。

「・・・やつぱり。先月より確実に増えているわね」

「というと、どれ位でしょうか」

「確か先月が14人ぐらいだったから・・・、5人近く増えている
わ。これ以上、妙な事件を起こしてほしくないのだけれど」

「でもお、仕方のないことだと思いますよお。ほとんどの連中がそ
んなことを思っているんですから」

「シャルの言うことには同感ですね。そういったことをしないのは
ほんの一握りなんですから」

「うーん・・・、だからってね、うちは他よりも人数少ないんだか
らそここのところも考慮してほしいのだけれど」

少し困ったような顔をしたリフィルに二人も思わず納得してしま
う。実際、彼女の言うことは冗談が少し入っているものの意をつい
た物言いが多く、何かと説得力が強いのだ。

「とりあえず、しばらくここにいるから、よろしく頼むわよ」

× × ×

一方、自室で待機していたリアラは体力を消耗して寝込んでいるリオルが起きるのをソファに座って待っていた。二人の部屋は至ってシンプルであり、彼らの寝る二段ベッドのゆったりした背もたれのカウチソファ、それに年代物の書き物机だけという部屋である。それでも彼らはこの部屋を気に入っている様子で、任務のない大半の時間はここで過ごしている。とその時、

「っ……だあ！てあれ、夢……？」

と勢いよくリオルが起きた。

「うわ……。ビックリさせないでよ、リオル」

「ああ……。ごめん、リアラ。……ううっ」

「どうかしたの、リオル？」

「いや、変な夢見ちゃってさ」

「どういう夢？」

「うん……。師匠に殺されそうになった夢をね」

「師匠に？……滑稽な夢なんだろうな、多分」

かみ合わないようでかみ合ったその会話の中に、リアラは何か思い出したような顔をした。

「そういえば、師匠で思い出したんだけど……。いま、どこに居るんだろうね。もうすぐ、長期任務が終わるころだと思うけれど」
「言われてみれば……。でもさ、どうせあの人のことなんだし、暫くほつともいいんじゃないかな」

「そんなこと言っちゃだめだよ。夢のなかみたいになっちゃう」

「そこまでさせないし」

と、二人は顔を合わせる。

「ところでさ、今は何すればいいのさ」

「ああ……。リフィルさんが暫くここで待機だつて言ってたよ」

「待機ね……。そだ、どうせならスパーク々にやらない？」

「スパークを？……別にいいけど。それなら、白に見てもらおうよ。」

武術なら白のほうが強いんだし」

「おお、良いねそれ。今呼んでくる」

と、それだけを言うと、リオルはすかさず部屋を出て行った。

× × ×

その一方、情報管制室では暫くの静寂と緊張が続いていた。相変わらずアネッサとシャルの面持ちは微動だにもせず、スクリーンとキーボードを見合わせつつ手を動かす。

「動きがないわね。珍しすぎて逆に鳥肌が立つわ」

「確かにそうですね。このまま何も起きなければいいのですが」

「でも、逆に怖いですよ。何か変なことが起きそうで怖いですよ」

確かにそうだとリフィルも思った。何も起きない日というのはそれだけでも嬉しいことこの上ないのだが、それが翌日になるとんでもない位の大事件を引き起こすといったことが過去に何回もあったからだ。その際には彼女の巧みな海戦術により凌ぎ切ってきた。それでも今日のこのことには少し腑に落ちないことが彼女にとって是不安でもあった。とその時、

「あれえ・・・？」

とシャルの舌足らずな声が暗い部屋の中に響いた。

「どうかしたの、シャル」

「いや、そのですねえ、さっきからハルク水路のほうで立ち止まっているポインタがあるんですけれど・・・。ん？あ、えっ、これってまさか・・・！？」

「何があっ・・・、これは・・・」

一瞬スクリーンを見たりフィルの目にも焦燥が映る。

スクリーンに映っていた赤いポインタの中に一つだけ、オレンジに光るポインタがあった。

「間違いないです。事件発生です！」

1 - (7) ゲーム・スタート

「間違いありません。事件発生です!」

「場所は!何所なの!」

「落ち着いてください、二人とも。今、ポインタ表示の特定をしますから」

管制室に一気に緊張が走る。ただでさえ現れても一触即発だというのに、事件発生にまで至っている。しかし、アネッサだけは唯一冷静を崩さず、キーボードとスクリーンに深い緑の瞳を閃かせる。

「ポインタ表示、特定完了しました。データベース、照合完了。この情報によりますと、4037番、ティフィエ・オルセイオと確定しました」

「久々の女性ね。彼女の違能は?」

「水流操作となっていますが……。少しばかり矛盾するところがあるのでは?」

「というと、どんな風にですかあ?」

「……シャルは後でちゃんと本を読んでください。大体、操作系の違能には、少なからず過剰使用でオーバーヒートが必ず起こるはずです。なのに何故……?」

「いいえ。それに近い例はあるわ」

アネッサの疑問に異議を唱えたのは、スクリーンを凝視していたはずのリフィルだった。

「オリアナ・イラートの事件は覚えているわね?」

「ああ、あの電流操作の……。でも、彼女と今回のことに何の関係が?」

「彼女の場合、現場近くに原子力発電所があったはずよ。そこから彼女は電流供給していた。同じ原理よ。ここ最近、下水道の濾過処理装置はかなり高性能なものになったわ。それに加えて、彼女がもし、きれいな水しか使わない潔癖者だとしたら……?」

「あつ・・・、じゃあ！」

リフィルの提示した解決法に、シャルの声が昂ぶる。

「そう。彼女は確実にとらえることができるわ」

× × ×

一方、リオルとリアラは白バイに腕を見てもらうため、本局内にある鍛錬場に来ていた。とはいえ、世界支局よりも戦闘要員が少ない本局では、そのスパーの音が空しく響くだけなのだが。

「・・・つとお。んで、何の話だっけ？」

「ちゃんと話を聞きなさいよ。要は、その話が巷で都市伝説みたいなもんになってるワケ」

「その・・・つと、何もないところに水滴が打言っているという噂が？」

「そうそう。まあ、結局違能絡みだと思うんだけど」

「思うじゃなくて、違能絡みなのは確定だつて、・・・つて、リアラ勝手に突き入れない！」

「えっ・・・。だつて、さつきリオルよそ見してたから」

「不意打ちは禁止だつて言ったじゃんか。全く」

「まあまあ。あ、それとリアラ」

と不意に白がリアラを呼び止めた。

「はい。なんです、白」

「さっきの突きはよかったからさ。それを実践に使えばいいんじゃないかと思つてね」

武術的な面で見れば、白のほうが二人よりも確実に上だ。そのことも相まってか、リアラの色白の肌は照れているかのように赤く染まる。

「あ、・・・ありがとうございます、白」

「はいリアラ、よそ見禁止！」

「うわ・・・とと。ごめん、リオル」

「ふふ。・・・あ、二人とも時間だよ」

いつの間持っていたのか、白の手中にはストップウォッチが握られていた。その小さな電子音が鳴ると同時、柔らかい素材でできた床の上に二人とも倒れこんでしまった。

「・・・つはあ、はあ・・・。あんがとね、白」

「いや、いいって別に。頼まれてやってるんだし。・・・そういえばさ、リオル」

「何？」

「さっきの突きもそうなんだけれど、リアラ結構伸びてきたから前線に出てもいいんじゃないかな、って思ってたさ」

「ん・・・、多分それは無理かも」

「リオルの言っていることの同感ですよ？まず、私の違能はリオルの違能の2分の1ほどしかないから、前線も難しいし、私の場合はフルバックが全般だから」

「そっか・・・。イケると思ったんだけどな」

リアラの言う事実には白はがっくりと落胆する。まあ、そんなことをしても仕方のないことなのだが。

そう思っているさなか、突如サイレンが局内に鳴り響いた。何度も聴いている彼らには分かる。事件が発生した時のサイレンだ。

「・・・っ！リオル、リアラ！」

「どうやら、また騒動を起こしたみたいで？・・・あいつら」

「と、ともかく執政室へ行きましょう！」

× × ×

執政室に入り、そこには案の定険しい面持ちで座るリフィルがいた。管制室から戻ってきたばかりなのか、顔にはうっすらと汗をかき、呼吸も少し乱れていた。

「・・・大丈夫ですか、リフィルさん」

「少し、急いで戻ってきたんだもの。息位乱れるわよ」

そういうと、二つの冊子をどこから取り出し、リオルとリアラに投げつけた。すかさず、二人はそれをキャッチする。

「それが今回のターゲットよ。名前は覚えたわね？」

「まあ、以前から目はつけていましたか……。まさかここで出てくるとはね」

「目をつけていたなら話は早いわ。今回の作戦を話すわよ」

「お願いします」

「今回の場合、ティファイエ・オルセイオは表には出て来ない。路地裏で事件を起こす可能性がたかひはず。そこを狙いなさい。追い込めば、倉庫街に出るわ。そこで捕まえて頂戴」

「今回の開始予定時間は？」

「15時20分。4時あたりで雨が降るらしいから、それまでに終わらせなさい」

「はい！」

二人の声が重なる。それが意味するのは、戦う覚悟を決めたときのみだ。つまり、それほどまでに今回の相手が実力者であることを示している。

「白、二人を出撃ゲートへ」

「了解しました」

× × ×

「やっぱさ、緊張するもんじゃないの」

ゲートへと向かう通路の途中、口を開いたのは白だった。

「……なんで今更、そんなこと聞くのさ」

「ん……、ゴメン。ただ、何となく、ね」

しばらくの沈黙。しかし、その中で口を開いたのはリアラだった。
「……本当は、怖いですよ？誰かと血で血を争うなんて、とても出来ません」

「リアラ・・・」

「でも、それでも、今は戦うしかない。今私たちにできるのは、それしかないから」

静かに、しかしその言葉は強く響いた。結局は血で血を洗うしかないこの戦いを、彼ら二人はしていかなければならない。たとえば、自らの持つ強すぎた^{ちから}違能にのまれたとしても、だ。

「リアラの言ってることは本当だよ。でも、絶対終わらせてやる。そして、必ず・・・」

「？どうかした、リオル」

「あ、いや。なんでもない」

リオルのつぶやきがどうやら白に聞こえていたらしい。すぐにかぶりを振り、エレベーター式のゲートに入る。

「あ、そうだ。白、今何分？」

「今？・・・15時13分だけど」

「開始まで7分か・・・。丁度いい」

一瞬、考え込むような素振りを見せたが、それもすぐに消えた。

「じゃあ、戻ったら、シャルからの通信頼んどいてね」

「分かった、分かった。・・・じゃあ、行ってらっしゃい」

「うん。・・・行ってきます」

1 (8) 異変はまた異変を呼ぶ

出撃ゲートから二人を見送った白は、すぐさま情報管制室へと向かった。すでにそこには、リフィルもいるため、あとはそこからの指令を送るだけ、という簡易極まりない仕事を請け負っていた。そして、長年本局にいるのも併せ持ち、ほぼ迷うことなく管制室の前へと来た。

「リフィルさん。二人を送ってきました」

『お疲れ様。今、開けるわ』

会話が終わると同時、自動ドアが開く。そこから先はスクリーンとキーボードの光だけという、薄暗い部屋のため何回も入ってはいるがやはり足元のコードには気を付けなければならない。

「送迎、お疲れ様です。そちらに椅子がありますので・・・」

「あ、いいよアネッサ。どうせ立っていないといけないんだし」

「そうですね・・・では、二人の現在地をポインタで表示します」
少し肩をがっくりさせたような素振りをアネッサは見せたが、すぐに表情を戻すとキーボードを叩き、スクリーンに地図を開いた。
「現在二人は、ハルク水路付近に到着。目的地まで70メートルです」

「今は17分・・・、時間的には丁度いいけれど」

「ですが、もしターゲットが現れなかった場合、どうするのですか」
リフィルに異議を唱えたのは、彼女の横に立っていた長身の青年だった。

「うお・・・。アンタも居たの、エース？」

「・・・悪いか？」

エース・グレイズ。この本局に現在いる戦闘要員6人のうちの一人だ。白よりも二つ上の18歳。精悍だが落ち着いた顔立ちをしており、表情の変化はアネッサと比べてもいい勝負になりそうなほど乏しい方だ。

「まあ、別にいいんだけど……。とりあえずシャル、二人に通信お願い」

「あつ、はい。分かりました」

今までボケーっとしていたのか、シャルは少しびっくりしたみたいだったが、すぐに通信機を繋いだ。

× × ×

その頃、リオルとリアラは指定ポイントのところまで来ていた。しかし、ポイントのハルク水路付近には案の定人が通るわけもなく歩きながら談話にいそしんでいた。

「……いない。なんでこう人がいないのさ」

「そこは仕方がないよ。ろじうらなんだし、ここを通るなんて偶にしかないって」

「……まあ、そうなんだけれど」

「まず、今回は私も資料は見たからしっかり対応できるつもりなんだけれど」

先日の失敗もあり、今回のリアラは少し自信に満ちているように見える。

「でもまあ、今回はぼくたちも目を付けていたから、捕まえられるのはうれしいんだけどね」

「でも、もし相手が抵抗してきたらどうするの？」

「そこは問題ないよ。今回の資料には使用可能って書いてあったから」

使用可能、というのは彼らの違能に関連している。そうそう簡単に発動させるのは、最も違能を嫌っているリフィルが許さないのかかなりの規制が入っているのだ。

「使用可能って……。でも、あのリフィルさんが偶にしか出さないから、貴重といえば貴重なんだけれどね」

「うん……。だからさ、今回は……。」

そうリオルが言いかけたその時だった。

狭い路地裏に響く、甲高い悲鳴。

「・・・リオル！」

「解ってる！行くよ、リアラ！」

悲鳴の響く方向へと、二人は走る。先の悲鳴が指すのは、事件が起きた証拠。しかも、違能絡みの、だ。そして、息を切らし二人が行きついたところには、どういうわけか水にぬれている男性の遺体と、青ざめた顔をした女性がへたりこんで座っていた。

「大丈夫ですか？立ってます？」

「ええ、ありがとうございます・・・」

すぐに、リアラは女性の介抱へと向かう。その間、リオルは男性の遺体をまじまじと見つめていた。よくよく見ると、男性の体にはもめた後のようなものも、刃物を使って怪我をさせられた部分もない。リオルはすぐさま、女性を訊ねた。

「すみません、この人はなぜ、こんなようになってしまったんですか」

「・・・さつき、私が来たときには、・・・すでにこんな風になっていて・・・」

「すでに、ね・・・もう一つ、聞いても？」

「はい・・・」

「実は・・・よく見てみたところ、この人は水路でなく、この路上で死んでいたように見えるのですが・・・彼が死んだのを見たのは、あなた一人ですか？」

「・・・はい。他には、誰も・・・」

「そうですか。今から、警察のほうに連絡しておきます。それから・・・」

言い終わると同時、腕輪から手の甲の中位まで見伸びた短剣で、リオルはそのまま、女性の羽織っていたケープごと切り裂いた。そ

の行動に、女性は思わず驚愕する。

「えっ……、リオル!?」

「逃げようと思うな。事情聴取程度では済まない。……ティファイ・オルセイオ」

名前を明かされた女性——ティファイ・オルセイオ——

——は、正体をばらされたことに動揺を隠しきれなかったようだが、すぐさま二人に背を向けて、逃げ出した。

「……逃げたか。まず、赤の他人にやさしくするのもどうかと思うんだけど、リアラ」

「……ごめん。まさかあの人がそうとは知らなかったから……。ところで、どうするの? あの人、逃げちゃったけれど」

「ああ、問題ないよ」

そう言い取り出したのは、10センチも無いような、小さな布きれ。しかし、この布きれはティファイが来ていた服の袖なのだ。

「こいつがあれば、対応はできる。リアラは屋根のほうに上がってくれないかな。奴のポイントを確認して。僕はシャルに連絡するから」

「分かった」

ほんのわずかな時間での話し合いを終え、リアラはワイヤーを使い民家の屋根へと登る。それを確認したリオルは、イヤホンをジャケットのの中から取出し、トランシーバー型の通信機のボタンを押した。

『はい。ただいまつながりました!』

「シャル、声大きいよ。さっきターゲットとのコンタクトに成功。これから逮捕に向かうから、アネッサにリアラのサポート要請してくれる?」

『はい! わかりましたあ! ? ……いたたた……。』

「……どこまでドジなんだか。まず、頼んだよ」

そついうと、ボタンを押し通路を見据えた。

「さて・・・、どうしようかね、こっから」

× × ×

一方、執政室へと戻ったりリフィル、白、エースの三人は管制室と
ダイレクト・コネク
の直接通信

でリアルタイムに情報の閲覧をしていた。

「ほぼ時間ピッタリ、てところね。仕事が早くて逆にこっちかビツクリよ」

「その分、嬉しいんじゃないんです？てっとり早く終わらせたいみたいですし」

「そうね・・・。雨が降る前には言っておいたからね」

「仕事が相変わらず、お早いようで」

リフィルの仕事人っぷりに、エースが思わず苦笑いを漏らす。しかしながら、いま世界で起こっている事件の大半は違能者がかかわっている為、そのほとんどはこちらで処理しないといけないのが彼女らの今の現状だ。

「それから、白。やっぱり、貴方やってみないかしら」

「・・・何度もその件は聞いていますが、まだ心の整理がついていないのですが」

「もう。3年前から頼んでいるのに、またその返事。もう聞き飽きたわよ」

リフィルが白に持ちかけているという話。それは、戦闘要員にならないかというものだ。人数が少ない本局にいて、そのうえで武術面は必ず抜けている彼女に、保護した3年前からリフィルは目を付けていた。しかし、自分にその資格はない、ことごとく白に断られているのだ。

「別に、決意がついてからでいいのよ？その時には思いっきり歓迎するから」

「いや、ですからそういうわけじゃなくてですよ？私には・・・」

『何をふざけているのですか、お二方』

言いかけたところにアネツサが口を入れたため、その話は一旦なしになった。

「いえ、なんでもなくてよ。それより、何かつかめたのかしら」

『はい。先ほど、リアラがティフィエ・オルセイオを見つけたと情報が入りました』

「場所はどこ？」

『倉庫街のほうです』

リフィル達が目を付けた場所に、綺麗に入ったらしくリフィルは安堵の表情を浮かべた。

× × ×

同時刻。通路の先にある倉庫街に逃げ込んだティフィエ・オルセイオは、かなり走ったのか息も絶え絶えだった。

「はあ、はあ……。くそ、なんではれたの……。？」

「いや、顔くらい覚えやすいですよ。綺麗な顔してんだしさ」

ふと、声のした方向に目を向けた。そこに立っていたのは、少しジャケットがぬれていた程度で、獲物を見つけたかのように瞳を煌かせたリオルだった。その瞳に委縮したのか、ティフィエはさらに怯えた表情を見せる。

「逃げるなって忠告したはずだよ。まあ、逃げても刑罰が軽くなることはないんだけどさ」

「ひ……。いあ……。？」

恐怖に負けたのか、彼女の声はかすれていた。そして、裁きを与える裁判者のようにリオルは静かに左手を上げたそれにつられるかのように、水路を流れていた大量の水が左手を中心に萃まる。

「さてと、これから先は一方通行だ。祈るなら今の内だ。生き残れるようにってね」

そついい終わり、リオルは左手を下した。

「んで結局さ、何をしたかったわけ？」

結局、ティフィエが目覚まるまでに10もかかったため、そのうちに両手足首に手錠をかけ、動けないようにしていた。

「・・・やっぱり、やりすぎだと思っよりオル」

「こんぐらいやないとダメだつて。で、質問に答えないんですか？」

「うふふ・・・。あなたたちの尋問に誰が答えるんでも？」

「へえ・・・、そういうことか。リアラ、こいつの臆斬ろう」

「わ、分かったわ！話せばいいんでしょう、話せば！・・・まず言っておくけれど、私はただの囃でしかないわ」

「は？囃？」

「そうよ、囃よ囃。あなたたちを引き付けるためのね」

「それって、どういう・・・」

リオルが疑問に思ったのとそれは同時だった。

突如、耳をつんざくような轟音が彼らを襲った。

轟音というよりは、むしろそれは爆発音に近かった。

「な...!？」

「すぐに行った方がいいわよ。どうなっているのかを見なければね」
挑発に耳をも貸さず、リオルとリアラは音のほうへ走り出した。

× × ×

その音が本局塔に聞こえたのはほぼ同時だった。火柱が立つのも見えていた。

「・・・リフィルさん、あれ・・・」

「・・・くっ」

窓の傍へ行ったリフィルは、その向こうを強く睨んだ。

× × ×

その現場に二人がついたときには、すでに火柱が煌々と上がっていた。周りには消防隊も来ており、事態が相当悪化していることを意味していた。するとそこに、リアラの通信機からアネッサからの通信が来ていた。

「・・・はい、今出ました」

「リアラ、そちらの火災はどうなっているんですか？」

「見た感じですけれど、恐らくアパートかと思われます。消防隊の後ろの方に、服にすすがついた方が何人か見受けられますので、住民は避難したみたいです。ですが・・・」

「その中に何人が泣いている方がいるみたいです。恐らく、まだ中に逃げ遅れた子供がいるのではないかと思われます」

その会話が聞こえていたリオルは、何かに怯えているかのような表情をしていた。彼の顔が一気に青ざめていく。

「ですからそちらの方でも・・・、あつ・・・」

「？どうかしたのですか？」

「いえ、なんでもありません。ただ・・・、私、また喋ってはいけないことを言ってしまったので・・・」

リアラがリオルのほうを見たときには、彼はすでにその場に力が抜けたかのように座り込んでいた。

そしてただ、怯えているかのように震えながら、彼は泣いていた。

1 - (9) 傷跡は癒えぬまま

任務が終わってから、3日が経った。

直後に起きた爆破事件の後、ロンドン塔に収容されたティフィエ・オルセイオから改めての事情聴取を開始。その結果、彼女はリオルとリアラの注意を引き付けるための罠であると判明。実行したのは別の人物であることが分かった。

そして、爆破事件については現場となったアパートに住んでいた住民28人は大した怪我もなく無事ではあった。しかし、中には火の手に気づくことなく、逃げ遅れてしまった住民、その被害者のほとんどが子供という凄惨な事態を招いてしまった――。

「・・・と言うのが、今回の任務の事後報告です」

一通りの説明を終えたリアラが、クリップにまとめられた資料をリフィルに手渡す。

「お疲れ様。確かに、受け取ったわ。・・・でも、ねえ」

「やはり、まだ不満が残っているのですか」

「別に、貴方が引け目を感じることじゃあないのだけれども・・・。やはり、何か腑に落ちないというか・・・」

神妙な顔をしたリフィルは、何かが引つ掛かっているというのは察していた。だが、それが中々分からないのだ。

「・・・まあ、エースも先日任務には行っていたから、同様のことが起きているかもしれないし・・・。こちらでもいろいろ詮索してみるわ」

「そうですか・・・。あ、あとリオルのことなんですけれど・・・」

「ああ、そこ？心配には至らないわよ」

リアラの言いたいことを先読みしたのか、リフィルはさらに続ける。

「もうそろそろ、白が慰めに行ってる頃だから」

× × ×

「くしゅっ……。誰か噂してんのかな……。？」

その白は、何皿か料理運搬用のワゴンに乗せ、リオルの部屋へ向かうべく通路を歩いていった。なぜか、猫同伴で。

「……。リオル、沈みすぎてないかな。心配だし」

そう独り言をつぶやきながら、彼女は彼らの部屋の前へ辿り着いた。しかし、そこで白は部屋に入ることを少しためらっている様子だった。

「はぁ……。来たのはいいけれど、怒んないかなアイツ。だからって、突然押しかけるのもなぁ……。よし、はいろ」

決心を決めたのか、白は恐る恐る部屋の扉を開ける。今は西日が少しだが射しているとはいえ、電気についていないその部屋は薄暗く見えた。

「……。リオル。入るよ……。？」

鍵の開けっ放しだった扉を、白は静かに開ける。上を見上げると、リオルの長い赤茶色の髪の毛が2段ベッドの端から少しだけでていた。

「……。白か。何？」

「何とかじゃなくて、食事、持ってきたからさ。食べないとダメだっつて」

「今はいい」

「……。あつそ。ちょっと、ソファ借りるわよ」

「……。ん。いいよ」

呆れながら、白はカウチソファに腰を掛ける。しかし、彼が心配なのか改めて上を見る。

「大体さ、むくれていても何もならないよ？」

「むくれてなんかいないし」

「だったらまだ……。って、リュリュ、ダメだってば！」

「ふえ・・・、え！？うわ・・・、ね、猫・・・！？」

「だからダメだつていたのに・・・」

彼女の腕からするりと逃げた猫は、正確に言えば本部の情報端末のようなものだ。体内に埋め込まれたマイクロチップが位置情報を示すだの、猫が犬よりも効率がいいからコッチにしただのと、リフィルから散々聞かされていたのだった。が、リオルからすれば、「アレルギーがあるから」と使用を避けていたのだ。

「・・・なんで猫なんか連れてきたのさ」

「いや、アレルギー物質は最低限取り除いたんだけどなあ・・・」

「だからって、僕の風邪が悪化したらどうするのさ」

実はあの事件の後、ティフィエ・オルセイオを追うために、リオルは水路の中を取って移動していた。加えて、爆破事件が起きた後、座り込んだまま動こうとしなかったリオルは、その後に降った雨に打たれっぱなし。結局、風邪をこじらせてしまったというわけなのだ。

「あれは仕方がないじゃない。リオルがいけないんだしさ。それとも何？なんか昔のトラウマ思い出したとか・・・、多分違うと思うけど」

「いや、あれでちょっと昔のこと思い出してさ」

「・・・マジで？」

「うん、マジで」

そういうと、リオルは寝そべっていたままだった上半身を起こした。その動きにつられるかのように、彼の長い髪が動く。どうやら、まとめていなかったようだ。まして、女顔と形容してもいい彼はこの状態だと初めて見る人は女子にしか見えないだろう。

（つて、ほぼ女子にしか見えないし！）

そう思いながら顔を赤らまる白を気にも留めず、リオルは、あまり自分から話すことのない昔のことを語り始めた。

「・・・まだ、あっちの方に居た頃のことなんだけど、あっちではさ烙印押されても精神保てないで能力が暴走するやつとかいたんだ。

そういう奴らと、押されても大丈夫だった奴とで、『模擬戦』って称されて、戦わされたことがあったんだ。僕にも、何度かあった。でも、・・・一番最初の頃は今でもあまり思い出したくないかな」

「・・・まさか、それが？」

「うん。そいつは、大体僕と同年代のやつで、確か、火の達能だったかな。でも、そいつは召集かけられてから精神のバランスが崩れてて、押された時にはもう手も付けられないくらいに暴走してた。僕が押されたのはそれより前だったから、すぐに僕が呼ばれた。その時はてつとり早く終わらせたいのとかがあったから、自分のものにしてそれで終わらせた・・・、その、筈だった」

「それなのに、そいつは死んだ。能力の暴走を、止めることはできなかった」

「・・・それって・・・」

聞いていた白の顔が、少し引き攣る。

「本当に、何が起きたのかわからなかった。ただ覚えているのは、そいつの体が炎に飲まれて死んでいったことだけ・・・。それから、なんだろうね。火災に子供が巻き込まれたって聞くと、動きたいのに立ち竦んじゃうってわけ」

自虐的にも聞こえるその言葉を紡いだ後、リオルは顔を俯けてしまった。その表情を見ようと、白はソファから立ち上がりその顔を覗いた。その顔は、なぜか涙に濡れていた。

「って・・・、リオル!？」

「情けないよね・・・。こんなんでも、誰かを、救うことなんて出来やしないのに・・・。こんなんじゃ、リアラを、みんなを、守ることなんて・・・、出来るわけが」

「ああああ、もう。リオル!」

聞くに堪えなくなっただのか、怒った白は無理やりリオルの顔を上げ、涙に濡れた碧い瞳を見据えた。

「いい、よく聞いて！もうそういう泣き言をいうのは無しにして！大体、もう過去を変えることはできないんだし、今の現状とちゃんと向き合わないといけない筈だよ！」

「・・・じゃあさ、白は変えたい過去はないの？」

「・・・っ、そりゃあ、あるけれど。でも、今はそういうの關係なし！戦闘要員としてゐるからには、もう戦うしか、ないんだよ？その意味を、キミは知っているはずだよ」

白の言いたいことを改めて理解したのか、リオルは顔を上げた。

「・・・そっか。なんか、いろいろ吹っ切れたかも。ごめん、白」

「理解できたならいいけど。あたしはこれ以上言及しないし。それと、そろそろ父さんに怒られるから行くわね」

そついうと、部屋の隅にいた猫を抱きかかえ、運搬用のワゴンを通路側に押した。

「ああ、あと一つだけ」

扉を開けてすぐ、白はリオルの方を振り返る。

「回復したら絶対食堂に來なさいよ。父さんとか、心配してんだからね」

「うん。・・・ありがと、白」

その言葉を聞き、白は部屋の扉を閉めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5742w/>

ツインズ・ブラッド

2011年12月29日01時46分発行